

## [報告]

## 柏井園と平家物語

今高 義也

はじめに

- 1 柏井園について
- 2 なぜ平家物語か
- 3 柏井の日本文学観
- 4 柏井の平家論
- 5 平家物語と『基督教史』

おわりに

はじめに

『基督教史』（1914年初版，1935年訂正再版，1956年訂正復刻版）の著者として知られるキリスト教史家・新約学者の柏井園（1870-1920）は，明治・大正期のキリスト教界を代表する文筆家であり，その神学思想は熊野義孝によって「教養の神学」と呼ばれた。柏井は日本の歴史の内に神の摂理が働き来ったことを信じ，世界の「キリスト教文明」の進展に資する日本の伝統文化/文学の一つとして，平家物語を高く評価していた。本講では柏井の平家論をとおして，平家物語を愛する一人の日本人とキリスト教との出会いについて考えてみたい。

## 1 柏井園について ―その生涯と著作

## 略歴

柏井園は，1870年6月24日，旧土佐藩士の長男として，高知県土佐郡旭村に生ま

れた。父祖は三好源氏の末裔という。父重宣は板垣退助と共に会津戦争に従軍、祖母も板垣を信奉していた。幼くして母を失い、継母の実兄西森真太郎から漢学を学ぶ。民権派の教員の罷免に抗議し、同志生徒と共に高知中学校を退校、片岡健吉を校長とする私立高知共立学校に移る。転校した同志生徒には片岡の二男恒次郎や、後に東北学院に進み共に米国へ留学することになる市村竹馬も含まれていた。その後、継母とも死別、そのおよそ一年後の1887年6月に、日本基督教会高知教会において米国南長老派宣教師グリナンより受洗。同年11月、同志社英学校に入学、歴史学徒となる志を立てる。教員には浮田和民らがおり、同志社教会の礼拝では浮田のほか金森通倫・宮川経輝らの説教も聴いている。在学中の1890年1月に校長の新島襄が死去、1891年に卒業して帰郷し、母校の共立学校および米国南長老派宣教師の経営する土佐女学校の英語教師を務める。1892年1月、新島の二周年記念会で追悼文を朗読。1892年7月、大挙伝道で高知を訪れた植村正久に知られ、その推薦で翌1893年9月に上京、明治学院神学部講師となる（英語と歴史を担当）。併せて『福音新報』の編集にも従事し、自らも寄稿する。1894年『日本評論』掲載の「ダンテの地獄」は徳富蘇峰の『国民新聞』で注目された（同志社の先輩蘇峰とは終生親交を結ぶ）。1903年4月明治学院神学部教授に就任、同年9月渡米してユニオン神学校並にコロンビア大学に学ぶ。共に留学した高知以来の盟友市村竹馬は1904年11月にニューヨークで客死。1905年4月、帰国後明治学院を辞して植村の設立した東京神学社教授となり、教頭職につく。同年の5月から11月にかけて、植村正久・内村鑑三・小崎弘道と共に「新約聖書改訳会」を組織、同会の書記と下訳（ヨハネ伝）の作成を担当したが、同会の事業は中絶（植村と内村との確執が原因か）。1906年日本基督教青年会同盟の幹事となり、雑誌『開拓者』を創刊、主筆として二年間編集にあたり、1907年には万国学生基督教青年大会の開催に尽力。1911年植村の呼びかけになる雑誌『宗教と文芸』の創刊に参加。1914年5月、同志と共に雑誌『文明評論』を創刊、同年8月には『基督教史』を出版。1917年1月、『文明評論』掲載の田川大吉郎「方法を知らぬ民」をめぐる、皇室の尊厳を冒瀆したとして東京地検が告発、柏井も編輯者としての責任を問われ、同年3月「新聞紙法違反」の罪により禁錮二ヶ月執行猶予二年の判決を受ける。東京神学社を辞した柏井の生活は窮迫する。1918年に日本基督教会千駄ヶ谷教会の主任伝道者となり、1919年4月同教会牧師に就任したが、1920年6月25日、白血病により満五十歳を目前に死去した。

\*本略歴は、柏井光蔵「柏井園年譜」（『柏井園記念講演』、1956年8月、謄写印刷）

および武田清子・小澤浩・岡田典夫編「年譜・柏井園」（『明治宗教文学集（二）』〈明治文学全集八八、1975年7月、筑摩書房〉）に基づきつつ加除訂正し、筆者の調査で明らかになった新たな事実を加え作成した。

評伝としては、同郷の親友・川添万寿得による「柏井園氏小伝」（『柏井全集』第一巻、1922年11月、警醒社）がある。

## 著作

翻訳を含め公刊された柏井の主要著作は次のごとくである。

- ・『基督伝』（翻訳、ロボルトソン・ニコル著、1901年）
- ・『ドラモンド伝』（1903年、教文館）
- ・『基督伝之転機』（1903年、教文館）
- ・『ダンテ研究』（翻訳、ノルトン著、1906年、教文館）
- ・『宗教的経験之価値』（翻訳、アンリー・ボア著、1907年、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『聖書手びき』（1908年、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『書窓遠景』（1908年、明道館）
- ・『ヨハネ伝研究 第一巻』（1908年3月、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『ヨハネ伝研究 第二巻』（1908年5月、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『ヨハネ伝研究 第三巻』（1908年6月、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『ヨハネ伝研究 第四巻』（1908年10月、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『基督教小史』（1909年、警醒社）
- ・『ヨハネ伝研究 第五巻』（1909年5月、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『ヨハネ伝研究 第六巻』（1910年2月、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『基督の教訓一斑』（1910年、教文館）
- ・『ピリピ書研究』（1911年、福音新報社）
- ・『エペソ書研究』（1913年、福音新報社）
- ・『基督と人生』（1914年、北文館）
- ・『基督教史』（1914年、日本基督教興文協会）
- ・『ヨハネ伝研究の葉』（1914年、日本基督教青年会同盟本部）
- ・『ナザレの人』（翻訳、アンダーソン著、1916年、日本基督教興文協会）
- ・『基督の人格及教訓』（1916年、北文館）

- ・『使命と使者』（1916年，警醒社）
- ・『基督教の耐実行性』（翻訳，ブラウン著，1917年，日本基督教興文協会）
- ・『我等の聖書』（1917年，日本基督教興文協会）
- ・『基督の教訓』（1919年，開拓社）
- ・『耶蘇基督の人格』【遺著】（翻訳，マッキントッシュ著，1921年，日本基督教興文協会）

柏井の死後、『柏井全集』が友人らによって企画され、刊行された。上記の著作を始め、諸雑誌に発表された論考・評論・随想・詩歌などを収めている。植村正久は甲辞において「柏井君は確かに基督教文学界の剛の者であった」と述べた。

- ・『柏井全集』六卷（1922年-1927年，警醒社）
- ・『柏井全集』続編五卷，別巻一（1934年-1935年，長崎書店）

「続編」は中絶していた全集の継続刊行を志した長崎書店社社長崎次郎に負うところが大きい。

なお柏井が発表した文章でこれらの『全集』に漏れているものも少なくなく、加えて当初企画されていた書簡や日記も収められることなく今日にいたっている。

## 2 なぜ平家物語か

### 米国留学に向かう船中の日記より

柏井にとって平家物語がどのような位置を占めていたかは、米国留学に向かう船中で記された日記の次の一節が象徴的な意味を持っているように思われる。

一九〇三年九月六日

午後二時より中等の食堂に於て礼拝をなす 市村氏司会して讚美を歌ひ有島〔武郎〕氏祈祷をなし phil.〔ピリピ〕第三章を輪読して後余と光氏と話を為す 余は約〔ヨハネ〕二章の□□につきて語り光氏は詩篇第九十の四に「己が日を数ふることを教へて智慧の心を得しめ給へ」の一句につきて語る 久万氏祈りて閉会す（中略）

今朝有島氏余の愛する書を問ふ 余は答ふるに左の諸書を以てせり

Colerige's *Aids to reflection*

Dante's

Green's *Short History of English People*

Gode's *Commentary on John*

Hugo's *Miserable*

Pascal's *Pensee*

平家物語

ここに挙げられた「愛読書」は、当時の柏井の〈教養〉の主要な構成要素を示すものとみてよいが、終生親しんだコールリッジやダンテ、パスカルなどに並んで、日本文学では唯一平家物語が挙げられているのである。

柏井が平家物語を最初に読んだ時期については今のところ確かめ得ないが、おそらくはキリスト教入信以前の少年時代であったと思われる。柏井は、西園寺公望の『東洋自由新聞』廃刊（1881年、当時柏井11歳）の事情を伝える檄文が心に残した強い印象や、民権派の教員罷免に抗議して高知中学校を退校した経験について後年言及しているが、平家物語の背景としての中世の動乱が、自らが生きた明治初年の激動と重なって見えたということもあったであろう。同じく若き日に柏井が経験した、実母および継母との死別も看過できない。平家物語を貫いている諸行無常の悲哀に少年の柏井が自らを重ねたとしても不思議はない。若き日における柏井の求道と受洗の背景については未だ丁寧な検討を要する問題としてあるが、母・継母の死や自由民権運動の矛盾を目の当たりにする中で生じたキリスト教との出会いは、柏井の〈眼〉を歴史と人生を導く〈摂理の神〉へと転じさせたのではないか。信仰者柏井の終生変わらなかった歴史への関心も、ここに原点を持つと思われる。

### 3 柏井の日本文学観

柏井が信仰的な観点から改めて平家物語に注目した理由はどこにあったのか。その検討に入る前に、柏井の日本文学観の基本線を確認しておきたい。柏井は「基督教徒と日本の文学」（『福音新報』第49号、1896年6月5日）で次のように述べている。

吾人は我国二千五百年間の歴史の上に表はれたる風韻性情を愛すること切なり。然れども甚欠くる所は大なる思想なり、而して大なる思想を表彰すべき人物なり。此点より考ふれば吾人は我国の歴史を探究し我国の文学を味ふのみにては洵に心

細きを感じず。(中略)

真正なる人格の観念、靈魂不滅の信仰、己を殺して神に敵するの悲哀、凡そこれ等の思想無き文学は人を修養し清潔ならしむるの力なきものなり。而して我国の文学にはこれ等の思想明ならず。

左れば吾人第一に勉むべき所は今迄世界に発達し来りたる最高最大の思想を取得するにあり。特に近世思想の何ものなるやを明にすべし。近來外交上政治上に於ては四圍の空気とも云ふべき者幾分か明になり来れども、同じく活発なる運動をなせる精神上の風潮に至りては吾人の知識猶ほ甚だ幼稚なるを免れず。

第二は是の如くして得たる思想を以て将来の日本を建設するのみならず、過去の人物及歴史に此の思想を含蓄せしむべし。固より昔の人が夢にも思はざりし人生観、世界観等の文字を牽強するは何の益もなかるべしと雖も、其以外に新血液を流注せしむべき脈絡少なからず。此点より云へば歴史小説及史詩等は非常なる進歩をなし得べき者也。

今日吾人の脳中に映写せられたる歴史上の人物の中には後世の史家詩人の道念詩情によりて潤色せらるる処如何に大なるや。頼山陽なくんば楠公の忠義も其内容頗る落莫たりしならん。(中略)

世は実に基督教の思想を待てり。史上の人物は基督教の生命を得て活動するを待てり。頭に基督教を説かば俗塵之を厭ふ。然れども基督教の思想を抱合すること深き程人を感じしむること深く、又高尚なる嗜好に適するなり。人々の胸中に鬱勃として文士詩人の啓発を待てる心情の精粹は基督教と帰を一にす。これ無意識の基督教なり。(下線は引用者による。以下同じ)

柏井によれば、日本文学において欠けているのは「大なる思想」——人格観念・靈魂不滅・自我に死んで神と対峙する悲哀など——である。それゆえ、

①「西洋の大なる文学・思想」——端的には〈基督教思想〉——を「取得」すること

② 過去の日本文学に、その〈基督教思想〉を「含蓄」させることが求められる。その際、日本文学には、〈基督教思想〉という「新血液」を「流注」させるべき「脈絡」が少なからず存在する。とくに「歴史小説」「史詩」などの分野において、日本文学の「非常なる進歩」が期待できる、というのである。

日本文学の裡に〈基督教思想〉による触発を待つ「脈絡」——「無意識の基督

教」——を見出し、新たな日本の「基督教文学」を創出し、世界の「基督教文明」の進展に貢献する。かような可能性を秘めた日本文学として柏井が注目したのが、日本文学を代表する「史詩」、平家物語であった。

#### 4 柏井の平家論

これより先、柏井は『福音新報』に三回にわたり「平家物語を読む」を連載している（『柏井全集』には未収録）。柏井が日本の古典文学を単独で取り上げ、『福音新報』紙上で連載したのは、これのみとみられる。この平家論の背景に、先にみた柏井の日本文学観が控えていたことは間違いないだろう。柏井は〈キリスト教思想〉が「流注」さるべき「脈絡」を平家物語のどこに見いだしたのか。

##### 「名残」

「平家物語を読む（一） 重衡卿と湯谷の條」（『福音新報』第二号、1895年7月12日）は、次のように書き出される。

陽春三月盛りの花と栄耀の都を後に見捨て、老母の病を看ん為に独り淋しき故山に帰りたる美人、幾多の年月を送迎して身漸く老んとす。凶らざりき、当年共に風雅の庭に列りて牡丹花にも比べられし人は今や縹緲の身となりて我住む里を過ぎんとは、今昔の感慨、栄枯の哀れ心に催して歌て曰く、

旅の空埴生の小屋のいぶせきに

故郷いかに恋しかるらん

当年花下の管絃、風流の歌千古蕩然として音を断も独り荒驛の下に邂逅して唱和したる湯谷と重衡卿、奇遇の中一種の真理を含蓄して読むものをして心に忘れ難からしむ

これは平家物語卷十の、囚われの身となって鎌倉に送られる平重衡（清盛の五男）と、かつて宮仕えしていた女性熊野（湯谷）との対面の場面である。かつては宮廷の中にあった二人が、今や「荒驛の下に邂逅し」、歌を交わし合う。柏井はこの静かなる一場面の要約・紹介から平家論の筆を起し、次のように評している。

平語一篇を貫注して比類なき清婉沈痛の韻を発する者は名残てふ感情にあらずや。故郷をば焼野が原と打眺めて一門西海の波に漂ふ。回想すれば昔の栄華豈夢の如き思なからむや。杳然として追ふべからざる雲烟の閒心恍乎として来往し、見慣れたりし山川楼閣も夢裡の色采を添へて宛ら天上の白玉京を望むが如し。是に於て己が生涯は兩個の別天地に分たれて而も其転変是の如く□忽なり。豈人事以上なる大活動の閃光心に映発せざるを得べけんや。見るべし祇園精舎の鐘の聲、沙羅双樹の花の色より寂光院の杜鵑の聲に至る迄徹頭徹尾何となく永遠界の調を帯びざるなし。ウラルドウラルス靈魂不滅の詩を賦して捉え難くして去り難き別天地の回想の中に我を永遠に繋げる靈絃を探り得たり。彼と此とは靈界と物界固より同日にして語るべからざるも兩者の相関する所幾分か類似せる所なからずや。(太字は引用者による。以下同じ)

現在の不遇において「昔の栄華」を回想し、己の生涯が「兩個の別天地」に別たれていることを感じ、兩者の間に引き裂かれる、そこに「名残」の感情が生まれる。同時にその「転変」の背後には「人事以上なる大活動の閃光」すなわち〈運命〉の働きがあることが意識されている。「祇園精舎の鐘の聲」が「永遠界の調」を帯びているというのは、変転極まりないこの世界にあって、その鐘の音は、対極にあるところの来世の存在を暗示しているということであろうか。

このような「名残」の情は、平家物語全篇に「貫流」するばかりでなく、他の日本文学にも見出されるとして、柏井は紀貫之の『土佐日記』と西行の『山家集』を挙げている。

俯仰低徊纏綿の情程人の心に徹さるゝものあらず。独りこれのみならず、紀貫之荒僻の任地を去りて夢裡の都に帰る。其樂さはいか許ぞや。而もこの南海の地に埋めたる愛児の名残は眷々たる清怨を止めて不朽なる土佐日記はこの間に成りぬ。山家集の著者亦然らずや。望を俗界に絶ち決然として歩を天上の靈界に進めんとするの際時に頭を回して一瞥すれば山川の美麗、恩愛の情、安ぞ腸を断たざるを得むや。人生の詩歌はポーロの所謂兩者の間に挟まるの時に生ずる者多しとす。

このように、「俯仰低徊纏綿の情」となって人の心に透徹する「名残」は、平家物

語をはじめとする日本文学に流れる重要な心情であり、〈キリスト教思想〉を「流注」すべき「脈絡」と考えられている。そしてその「名残」の感情は、パウロのいう「両者の間に挟まる」状況（フィリピ1章20～26節）を生きるキリスト者の宗教的経験と相通ずるものとして捉えられているのである。

### 「雲烟の気」

「平家物語を読む（二）嵯峨野」（『福音新報』第四号，1895年7月26日）で柏井は「平家物語の美」について次のように述べている。

ブラウニング夫人「<sup>ゼ、ハウス、オフ、クラウド</sup>雲の家」と題する詩を作る。其冒頭の意に曰く、

吾は雲の上に家を建て吾が想を其裡に宿しめん。

斯想は地を離れて高く揚れども天に到るには猶卑し。

吾は唯夢の裡なる事を語り、見るに美はしき家を建てん。

月光雲の上を照すとき、爾と共に打眺むる其処にぞ家を建てん。

人の理想塵土の界を超脱して、而も未だ雲無き光明の界に上る能はず。杳然たる雲烟の間に徘徊して其処に映ぜる光彩の美に驚き、心を宿すべき天地を求めんとす。詩歌宗教共にかゝる処より生ずるもの多しとす。頼山陽曰く文字雲烟の気を帯ぶるものは古今有数なりと。平家物語の美はこの雲烟の気に富めるにあり。其文章は石鏃を没するの沈着あるにあらず。さりとして人事皆空なるの悟り徹底して、純金の理想を捉へ得たりと云ふにもあらず。この両者の間一種鏡花水月の縹渺たるが如く望むべくして就くべからざる者あり。『梅津の里の春風によもの匂もなつかしく大井川の月影も霞にこめて朧なる所』。『小鹿鳴くこの山里と咏じけん嵯峨のあたりの秋の頃』。読み来れば雲烟の繚繞にて俗界と相遠きの思なからずや。其情は人に近くして其境は人に遠きが如く、恰も暮夜砧声を聞くに似たり。これ平家物語の妙処なり。

「雲烟の気」とは、現世であって、定かならずともはるかにかすかに来世の存在を感得させるような宗教的な〈空気〉であり、平家物語の美はこの「雲烟の気」に富むところにある。それが特に顕著に描かれているのが「嵯峨野」であるとして、柏井は次のように述べている。

想ふに当日の六波羅と嵯峨野は如何なる光景の異を呈するものぞ。彼には栄華の春を誇り歌舞の声日夜に紛々たるに引きかへ、後夜晨朝の鐘の聲は諸行無常を鳴らし、花の如き人は老僧姿に瘦せ衰へて誦經に余念もなし。一天四海を掌の中に弄せる浄海入道〔清盛〕の暴横もその清朝の天地には跋扈するを容さず。『仏も原は凡夫なり我等も遂には仏なり。いづれも仏性具せる身を隔つるのみぞ悲しけれ』と妙齡の婦女〔祇王〕絶大の哲理を喝破して金殿玉楼を睥睨するの気概あり。噫これ何等の天地なるぞ。平語の愛すべき所は唯六波羅のみを描かずして嵯峨野を描けるにあり。功名勲爵の天地以外に靈雲飄蕪たる境界を開拓せしにあり。赫々たる權威の烈日草木を枯す如き一方には淡月朧に照り暗香浮動して俗塵を絶つ。これ真正の詩境にあらずや。吾人の胸底には必ず一個の嵯峨野なかるべからず。

柏井はここで、平家物語卷一の、清盛に捨てられ嵯峨野で出家した「祇王」の物語を踏まえ、清盛の栄華と権力とを象徴する「六波羅」と祇王が仏道に専念する「嵯峨野」を対峙させ、後者こそが、「靈雲飄蕪たる境界」を描く平家物語の「妙所」であるというのである。しかし続けて柏井は、

若夫れ万峯を互り尽して「雲の家」を眼下に望み、曇りなき光明を仰ぎ、永遠の清音を聞くととき如何の情懷ぞ。是また平家物語に求むべからざる所也。

と述べ、「平家物語を読む（三）海上」（『福音新報』第一四号、1895年10月4日）では、

其の眼形象世界の外に徹し所謂千載無窮の恨を抱くものにあらずんば未だ碧天蒼海の悲哀を歌ふに足らず。平語独特の風韻一にこの靈なる觀念より来る。其美なりと雖も大なるものを欠く所以、畢竟これと相伴ふて生ず。

として、平家物語は「美なりと雖も大なるものを欠く」ことを指摘する。

柏井にとり平家物語を貫くところの「名残」の感情と「雲烟の氣」が、日本文学に表われた小なる宗教的経験あった。とすれば、それが拡充されて接近すべきところの大なる経験＝キリスト教特有の内的経験とは、柏井において、いかなるものとして捉えられていたであろうか。

## キリスト教特有の内的経験

柏井は「平家物語を読む」とほぼ同時期に書かれた「深遠なる意識」(『福音新報』第18号, 1895年11月1日)においてキリスト教特有の内的経験を、次のように表現している。

吾人の心は花木枝を深溪の上に交へて其底を看る能はざるに似たり。取るに足らざる小思想を粉飾点綴して自ら喜び其根底の薄弱ならざるや否を忘れ易し。一たびこれ等の物を擺脫して人間心性の奥秘に探り到れば、種々壮大なる景觀を蔵すると共に、一大破罅の存するに注意すべし。彼の春風麗日花咲き鳥歌へるエデンの園にアダム、エバが罪に墜ちし後エホバの声を聞て畏れたりと記されたる一点の雲影空を掠むる如き経験より、更に進んでダビデが詩の五十一篇に縷述せる深刻にして而も往復多曲なる罪惡の感念に到り、更に使徒ポーロの心裡の衝突に到る迄仔細に之を比較し来れば、靈なる思想次第に深きに進むに従ひ其中に蟠結せる暗澹たるものの影を覚ること愈々切なるを見るべし。之を斂むれば一点の黒子に過ぎざれども之を放てば濁暗の氣天地に満ちんとす。誠にこれ膏肓に入るの病なり。人々苟も心を潜めて自家胸底の音に耳を傾くれば決して朗々たるものにはあらず必ず一種破鐘の響を帯ぶ。之を撃つこと大なれば其変調之に伴て愈々大なり。抑之を療すの道決して区々たるべからず。必ずや之を溶解鑄造するに足る炎々たる力を用ゆるを要す。救拯てふことは蓋し人生第一の必要なり。

宗教なるものは其中実に無限の悲哀を含めるなり。基督教徒が言を慎み行を潔くし、浮華なる樂を去り工夫鍛錬して世に勝つる精神を養ふて倦まざるものこれ単に円満純血の美を冀ふの詩歌的樂事にあらず。かくの如くせずんば已む能はざるなり。その道德は宗教心より發し、其宗教心亦一片已み難き真情より来る。(中略)古の希臘人好んで完全てふことを説き、基督教の道德亦之を以て理想となす、然れども兩者の間大なる逕庭あり。希臘人の徳を磨くや恰も玉人の玉を磨くが如く基督教徒の徳を磨くや「遺恨十年磨一劍」の氣象あり。發しては巨刃天を摩す清教徒的精神となり、潜んでは金針繡を刺すの細心なる工夫となる。之を一貫する胸底の情懷に至りては異教時代の人の到る能はざる所あり。故に希臘時代の完全に至りては円満麗澤取て掬すべく、描きて伝ふべし。無限に連なるの仰望心を欠き、胸底に透徹するの痛切を欠く、輕鷗の波に浮び、小星の空に輝くと一般なり。基督教の完全てふことは預言的の意味を含めり。無限の悲哀を負ふて無限の發達

を仰望す。須臾の生命いかで之を満足せしむるを得むや。弦月未だ盈たず、花蕾未だ開かず、余情を靈界の邈なるに止めて浅薄なる意識中の物たるを容さざるなり。

自身の「救拯てふことは蓋し人生第一の必要」であるとの深刻な自覚に至り、神の前に立つ「無限の悲哀」を負い、かつ「無限の発達を仰望」するという矛盾を裡にはらみながら、「余情を靈界の邈なるに止め」て救いを待ち望むという「深遠なる意識」の経験。柏井が平家物語に欠けるという「大なるもの」は、これに他ならないであろう。

それでは、いかにすればこの経験に接近することができるのか。この点についての柏井の見解は、その「経験」をめぐる議論に読み取ることができるように思われる。

#### 「経験の範囲」の拡充

柏井によれば、人間は自己の小なる経験を原として、他者から「経験外の経験」を学び知り、自らの小なる経験を〈拡充〉させるによって、人類が経験してきたキリスト教特有の宗教的経験に近づくことができるという。

人若し経験を語れば余は経験なき経験を語らん。之を有すること経験なれば、之を有せざるも亦一種の経験たるを失はず。且つ人須臾の生涯を以て悠々無限の世界に処す。境遇の制限あり、性向の長短あり。如何に経験に富む人と雖も経験せるものを以て経験せざるもの多きに比ぶれば滄海の一粟も啻ならざるべし。是に於て人は経験以外の経験を得るの道を索むるの必要あり。

余は敢て経験を軽ずる者にあらず。嘉肴ありと雖も食せざれば其の味を知らず。人は躬ら実験したる所に非ざれば其の深妙の味を解する能はず。語って之に透徹する能はざるは飽く迄も認むる所なり。然れどもこの種の経験は分量に於てさまざま多く有し難く、又有すを要せざるなり。芥種一粒の経験は以て山を移すに足れり。而してこの種の経験は微妙にして独得のものたるが故に地に埋れたる芥種と等しく取りて之を人に見する能はず。たゞ機に触れ物を借り、発して其の人の品性となり思想となり信仰となり感化力となる。偶々靈想の高調に乗じ至愛の指に弾ぜられてこの経験を訴ふる事は之あらん。たゞ之を裸体にして何人に対しても時を擇ばず漏らし得る経験は其の経験の頗る浅薄なるか或は其の人の性格悲しむべく粗笨なるに帰せざるを得ず。(中略) 且つ経験以外の経験も寄生木の如く人生に附着するものにあらず。空に聳ゆる長松も其の根ざす所は地にある如く、多

少の経験を原として初めて経験以上の天地に飛躍し得べきことはこれ亦忘るべからざる所なり。我等は自己の小さき経験を資本として次第に経験の領分を拡充して経験以外の天地に進み、爾々進んでは奥妙不思議なる霊界の経験を聊か味ひ得べきを学びたり。我等はこの道即ち正当の道なりと信ず。

(「経験の範囲」『福音新報』第三六六号、1902年7月3日)

柏井にとって、平家物語の読書体験は、いわば、日本人特有の宗教的文学的経験＝小なる経験として、重要な意味を持つ。キリスト教という日本人にとっては〈経験外の経験〉一大なる経験を、聖書や史書・文学を通して学び知り、それによって自己の小なる経験を拡充することは、日本人がキリストにおける救いの経験を自らのものとする一つの道となる。——柏井はそのように考えたのではないか。

## 5 平家物語と『基督教史』 — 〈物語精神〉をめぐって

### 運命観と物語精神 — 石母田正『平家物語』より

前節で、柏井が平家物語に見いだされる重要な「脈絡」として「名残」の感情に注目したことを確認したが、これに関連して、名著として名高い石母田正『平家物語』(岩波新書、1957年)の提出している議論に注目しておきたい。石母田は平家物語を貫く観念として通常〈無常観〉が取り上げられることに対して、次のような見解を提示している。

この時代の現実は汚濁と醜悪にみちた末代の世であり、現世の一切は無常の理にしたがう定めなき世界であって、そこからの救済があるとすれば、来世をもとめて往生する以外にないと考えられた。この末世・末代の思想から生まれる悲観精神と哀感が、すべての貴族に共通する考え方であるとあってよい。平家の作者も、この時代のもっともありふれた思想と考え方をもっているだけであって、物語のどこを見ても、特別にちがった、あるいは他人よりも勝れた思想家であったような証拠はなにもない。(中略)

この時代に、西行法師というすぐれた歌人がいた。時代を代表する歌人である。その『聞書集』に木曾義仲の詩を詠んだ歌が一首のこっている。

木曾と申す武者、死に侍りけりな

木曾人は海はいかりをしずめかねて死出の山にも入りにけるかな  
 (中略) 西行は、義仲の生涯においておこった過去の一切を、自己の現在の心情のなかに内面化してしまっている。これにたいして物語の作者は、平家にみるように、義仲の過去を、その系譜や生立ちからはじめて、遭遇した合戦や恋愛や政治的対立や怨恨などのさまざまな葛藤と事件を、一つの時間的な経過と展開のなかで叙述しなければ、義仲の「怒り」一つを理解できない性質の人間である。物語作者はこのような外的なものに媒介され、客観化されなければ、義仲の「怒り」というものをとらえることができないのである。したがってそれは西行の精神、歌の精神とは異質のものである。(中略) そのような仕方であれば、人間を理解しがたい一つの精神的傾向を、言葉は熟さないが、ここでは物語精神と呼んでおこう。平家物語の作者というのは、西行や定家と質の違った物語精神を、豊富にもっていた人物にちがいない。(中略)

斎藤別当実盛は、平氏の滅亡、自分の死の運命を自覚し、予言する人物になっているが、物語ではそこに意味があるのではなく、それにもかかわらず彼が故郷に錦を飾りたいと、わざわざ宗盛に許しをうけて戦場におもむくところに、面白さも哀れさもある。そのような人間の矛盾したところに作者は興味があるので、人間の営みの愚かさを達観してしまったような人物には興味をひかないのである。(中略) つまり平家物語の作者は、あとから考えれば滅亡するほかなかったような運命にさからって、たたかい、逃げ、もがいたところの多くの人間に興味をもったのである。それを物語にしたことによって、彼は人間の営みを無意味なものとかんがえる思想とたたかっているといってもよい。それは作者の意図や思想と矛盾しているかもしれないが、客観的にはそうなのである。平家の作者は、暗い運命観や無常観にとらわれているようにみえて、じつは内乱がくりひろげた人間の生き方の種々相、その悲劇と喜劇が面白くて仕方がなかったのであろう。(中略) 現世の生の無意味さを説く精神が強まってきているこの内乱時代に、現世の生の面白さ、豊かさ、複雑さを教えた点に、平家物語の価値がある。(第一章 運命について)

石母田によれば、平家物語の作者は動乱・無常の世において矛盾に苦しみ葛藤する現実の人間の諸相を一つの時間の経過の中で叙述せずにはおられない〈物語精神〉に富む人物であった。おそらくは柏井も同様の人物であり、柏井が平家物語に魅力を感じ

じ、取り上げていたのには石母田のいう〈物語精神〉への共鳴も作用していたのではないか。実際、柏井は自らの『基督教史』においても、現実を生きる人間の矛盾と葛藤に目を向け、個々の人物の個性的な生涯を要所で詳しく叙述しており、それが『基督教史』の独特の叙述形態となっている。それは石原謙が次のように指摘している通りである。

一方においてはキリスト教の一貫した発展を辿ろうとする見方があり、そうしてその間において個々の人物あるいはその信仰・思想・事業など個人を中心とした見方がこれと結びつけられているようであります。(中略)特に人物を重んずるという面は、最初から個人の伝記あるいは史伝に興味をもっておられたことについてその主要な根拠が認められるでしょう。しかしそれにしても先生がこの書物〔『基督教史』〕を書かれたときに個々の事件、表面的な歴史の変遷、興亡盛衰というようなことを描きつつ、その背後に貫かれているキリスト教的信仰を見出し、そして歴史は正確にその内面的な、信仰的な意味を指し示すものでなければならぬという確信を持っておられたのではないかと推察されるのであります。

(石原謙「教会史と柏井園先生」『石原謙著作集』第十卷、1979年、岩波書店、436-439頁)

柏井自身、『基督教史』の第一章「総論」において次のように述べている。

基督教は歴史的宗教なり。耶蘇基督なる歴史上の人物により開創せられたる宗教にして、人類を救はんとする神の意志と目的と聖徳とは耶蘇の人格と事業とに於て最高の示現を見たりと信ずるものなり。基督教はまた歴史上に於て偉大なる発展を成したる宗教なり。遍く全世界に宣伝せられ、其の教理、生活、制度、文学に於て種々なる成長を遂げたり。其の生命発展して竭きず、世界の歴史に影響し、又歴史より影響を受けて複雑なる結果を生じたり。

基督教は斯かる発達を為す間に其の真髓を發揮す。故に基督教の何ものなるかを知らんと欲せば、源を原始基督教に探ること必要なるとともに、又基督教歴史の全局面に亘りたる知識を有せざるべからず。各時代にそれぞれの長所あり、貢獻あり、又失ひたる所、忘れられたる所あり。之を質さざるべからず。是の如くして現代の基督教の由て来りし道を了解し、其の長短得失と又将来進むべき方向

に就きて正しき観念を有するに近からん、基督教を知らんが為に其の歴史を知るを要する所以こゝにあり。更に又世界史の一部として之を觀る、基督教は西洋文明の最大源泉にして、現在の社会を支配しつつある一大勢力なり。欧州諸国の道徳哲学文学制度芸術にして基督教と交渉なくして成長発達せしもの少し。古代より中世に、中世より近世に移る変遷連続の中心生命はここにあり。是に於て一般教養の一部分として基督教の歴史的知識の重要なるは論を俟たず。況んや又精神界の偉人英雄の跡我等を鼓舞啓発するもの多きに於てをや。

平家物語は、無常なる運命に対峙して来世における救いを望みながらも現世に執着するという矛盾・葛藤の物語——複雑多様な「名残」の感情を「一つの時間的展開と経過」に沿って叙述した。とすれば、柏井の『基督教史』は、同様に一見非合理なる歴史の中で苦悩しつつも救われていく個々の人間の人生を要所で叙述しつつ「人類を救はんとする」神の〈摂理〉の展開と経過の全体像を描いたものであった。「基督教の何ものなるかを知らんと欲せば、源を原始基督教に探ること必要なるとともに、又基督教歴史の全局面に亘りたる知識を有せざるべからず」と柏井がいう背景には、平家物語の著者と脈絡相通ずる豊富な〈物語精神〉があったのではないかと思われるのである。

#### おわりに

柏井が「平家物語を読む」を連載した1895年7-10月は、日清戦争の直後にあたる。日清戦争の前後は「国威発揚」の空気が高まり、キリスト者も日本人論や日本文化論を相次いで発表した時期であった。内村鑑三の『日本及び日本人』(1894年)(後年『代表的日本人』と改題)や植村正久の「基督教の武士道」(1894年)などがその代表的なものである。内村や植村らの日本人論は日蓮や西郷などのいわゆる「英雄」的な人物とその思想をとりあげ、「武士道」的な精神である「独立」「唯物的精神に打ち勝つ」「節義」などの徳目を、キリスト教を「接ぎ木」する「台木」として抽出するのを通例とする。そのような中で柏井は平家物語という中世文学に注目し、その限界を認識しつつ、なおキリスト教によって触発さるべき「脈絡」を「名残」の情や「雲烟の気」等の宗教的経験に見いだしている点に、柏井の個性が認められる。柏井は日本文学に見いだされる宗教的経験を原として、それを拡充しキリストによる救いの経

験に接近する道を探究した。換言すれば柏井は伝統文学から「無意識の基督教」をくみ上げつつ、日本人の救いに資する「基督教文学」の創成をめざしたのである。次の文章は、平家物語を愛し、自らの文筆を「宗教の聖壇」に献ぜんとした〈文豪〉柏井の志を示すものといつてよいだろう。

我国の宗教文学に於ける一大欠乏あり。即ち宗教の典雅深粹なる味を伝ふべき文章に乏しきことなり。新旧約書の高く美しき余音をば汲み取りて之を紹介し又其の感化を補ふべき種類のもの少きにあり。基督教伝道する為にも、又既に信じたる者を教育する為にも此の種の書籍最も必要ならずや。(中略) 左れば今より後其文筆をば宗教の聖壇に献ぜんとする人は其信念を厚くし思想を精醇にするのみならず、文体をも充分に精煉せざるべからず。不完全なる日本語をば出来得べき丈自由に宗教の思想調子を容るゝに適するやう工夫すべし。出来得べき限り平易にして又典雅の趣味を保たざるべからず。かくて其文章は反復諷誦するに足り啻一日に之を読み了るのみにあらず日常座右の師友たるに適するものとなすべきなり。今日の所急にかゝる創作は望み難くんば良き訳文にても可なり。基督の伝記の如きは美文を以て訳すれば種々なる需要に應ずるに足らん。信仰厚き人の伝記も亦可なり。

(「典雅なる宗教文学の必要」『福音新報』二六一号, 1900年6月27日, 『柏井全集』未収録)